間飛居（惑い）

赤羽美代子

二年前の四月に、一卵性双生児、兄のS（辰）、弟J（丈）が入園した。彼等は未熟児で誕生し、入園当初の、身長・体重は、やや小柄で、知能の遅退がみられた。

入園当時のS・Jは、全くの同一人物と云えるだろう。ふたりを見分ける手掛りの一つとして、顔の周囲を調べると、SもJも頭の旋毛を中心に、二、三本の同じ長さの髪の毛がポッと立ち、風に揺れる。又、口元は、同じ前歯が一本ずつ抜けて、何とも可愛いい。性格は、S、J共に荒っぽい。行動の早さ、激しさは、秒よみの早さで、たわいない事から泣き叫び、手許の物を素早く投げる。椅子・植木鉢・小動物の小屋・箱積木など。彼等の周囲で遊んでいる子等は、急な出来事に、身の危険を避ける事で精いっぱい。B夫が泣きながら「Sだか、Jだか知らないけど、僕を打ったー。アーン」と訴える。又、A子も泣きながら教師の所に馳けてきたのだが「どっちだろう？」と、再び元に戻り「私を打ったのは、Sちゃんなの？　Jちゃんなの？」と聞いている「僕、Sではないのに、Sか？　って聞いたー。ワーン」と、Jが泣きわめく。

K郎のことばは、サ行がタ行に変化する。そのK郎が、Sに興味を持ち、Sと連れ立って歩く。時どき、K郎は、Sの名を呼ぶ。Sは、名を呼ばれる度に癇癪を起し、物を投げ身を捩って泣き伏す「僕の名前のこと、チンちゃんって云ったー。ワーン」K郎は、慌てて「チンちゃんなんて云わないよ。チン（振）ちゃんって呼んだんだよ」「あっ、又、チンちゃんって云ったー。ウワーン」と云う具合の一日が続く。

一方、教師は、家庭との連絡を密にし、S・Jの見分けが早くつく様に、努力をするがその工夫も束の間に、足元から、音を立てて崩れ落ちる。朝、登園後、S・Jは、早くも泥ん子になって土に熱中する。何度も着替えそのつど、服のデザイン・色が気に入らないと、又一と騒動。今、青色の服がS、黄色はJと判断したが、目まぐるしい変化に、名前を呼び違えては、ふたりに泣かれる。

早くSはS、JはJとしての人格を認めた関係に入りたい。そこから何かが生まれ、落ち着いた交わりが開かれていくのに。と、焦れば焦る程、彼等は教師の配慮にはお構いなく、元気に前へ、前へと突き進んで行く。教師は、置き去りにされた様で落ち着かない。

この激しい行動に、他の子等の危険を考慮した私は、彼等が物を振り上げると、周囲の状況判断から咄嗟に振り上げた品を摑む。

或る日。Jが振り上げ、私が摑み、小さな力、大きな力がぶつかり合う。Jの揺れ動く心の音が、私に、トクトクと伝わってくる。その瞬間、私の対処が、Jの心の解決に何の役にも立っていない事を、更に痛感する。

一体、Jの心の何が、この吹き出る様な行動を起こさせるのか。身体の中で、とぐろを巻いて、燃え上がるエネルギーの塊りを、Jは溶かせないで焦れている。彼にとって、この行動は、ことばであり、訴えである。Jはこの心の発露をどう理解するのかを、整理できずにいる。私は、Jが振り上げた椅子と、彼の身体とを包み込み、庭に面した場所に連れ立つ。「ホーラ、ここで投げてみよう。一、二、三！」私は、一日も早く、S・Jの胸中に情緒の安定が得られる様に、と、祈りながら。又、Jが、ことばにできない、ドロドロとした感情を吐き出すために。

Jの心を乗せた小さな椅子は、庭に飛んだ。ふたりが少しでも、自己の気持ちを、整理できるまで、十分に時間を掛けようと思う。子ども等と、真正面から関わる時、何歳なのに何が出来ない。又、教育的でない。との、発想から出発すれば、その子のおもてを見るばかりで、裏を深く知る事は難かしい。

私は、事の解決を急がず、間をおく。私の狭い心を、広くて深い、幼児の世界に、大らかに飛ばそう。子等が落ち着いて、身を静める居をつくり上げていこうと、願っている。

こうして、SとJの入園以来、惑いの中にあった教師たちであったが、忘れてはならない、保育の原点に、再び連れ戻された。焦りから、苛立ちから、解放された私の惑いは、「間・飛・居」に、生まれ変わっていった。

兄Sは、彼なりに、現状を把握しようと努力し、心のバランスを調え、優しく、明るい子に成長し、この三月巣立って行った。弟Jは、あと一年幼稚園生活を過ごす事になった。

目下、J君の言語生活が、豊かになる様に何よりも、彼が、生の自然を輝かすために、教師陣は「間・飛・居」中なのである。

（東京・霊南坂幼稚園）